

巻頭言 「確かな将来」

宇野 元

主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし

あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて

あなたに平安を賜るように。

民数記 6, 24-26

苦しい現実から逃げだしたハガル。アブラハムとサラの所から。いいえ、アブラハムとサラとハガルの所からと言うべきでしょう。ハガルも家族の一員でした。しかし十分に顧みられません。ハガルは奴隷でした。奴隷が認められている所には、人間の暴力の力がつよく働きます。

荒野においてハガルは神の使いと出会います。御使いが問いかけます。あなたはどこから来て、どこへ行こうとしているのか？ ゆく当てなどない。どこから来たかはもちろん答えられる。でもそこに帰る気持ちはない。ところが御使いは、まさにそうするよう勧めます。彼女はしがいました。したがうことができました。なぜなら、行き詰まりの状況のなかに将来が示されたからです。神の言葉は子どもの誕生を約束し、明確な展望を彼女に与えました。

人間が支配しているように見える現実のなかに、人間の支配にまさる力が存在しています。このひそやかな事実に驚き、語られた言葉が記録されています。「あなたはわたしを顧みられる神です」(創世記 16, 13)。神が顧みておられる。それを知る。彼女にとってそれで十分でした。

神が見ておられ、確かな将来を約束してくださる。民数記のアロンの祝福が意味するように、御顔を向けて照らしてくださる。このことが私たちの目を明るくします。すなわち、自分について、自分の周りの人たちについて、時代の困窮について、トンネルのような不安な眺めに光が与えられ、狭くなる視野がひろげられます。そして今の時を新しく生きる者にされます。

ハガルの場合と同様、私たちの持ち場は薔薇の花園ではありません。それにもかかわらず、信頼の心をもって自らの委託を行うよう導かれます。思慮に富む神が共にいます。この事実が 2023 年の私たちの歩みに伴っています。